

風景構成法から見た広重の風景画

- 風景構成法による空間図式の研究 その2 -

正会員 柳沢和彦*1

岡崎幸幸*2

守山敦子*3

風景構成法、図式、描画の発達

心像、広重、風景画

1. はじめに

風景構成法の「枠」に対する「川」の類型化から得られた知見は、浄土教絵画ややまと絵、浮世絵など日本の様々な絵画あるいは庭園などの空間構成に対して、興味深い形式的類似性を持つ。このことから、日本の伝統的な空間芸術に対して、風景構成法の視点からの新たな分析や解釈が可能となる。発達という時間性と歴史・伝統という時間性を重ね合わせてみることで、人間的意味に立脚した日本の空間図式が立体的に解明できるのではないだろうか。

このような背景のもと、本論では、日本人にとって非常に馴染み深い広重の風景画の空間構成を、風景構成法の視点から分析・解明することを目的とする。

絵画や景観など関連する既往研究は数多く存在するが、特に広重の「川」の風景に関するものとしては、その構図を数量的に解明した鶴、萩島他の研究¹⁾がある。本研究は、これらを踏まえつつ、風景構成法の視点からというアプローチで広重の空間構成の特徴を明らかにする。

2. 方法

六種の「東海道五十三次」²⁾および「木曾街道六十九次」³⁾注1)「名所江戸百景」⁴⁾のうち、「川」が描かれた計167作品を対象とする。風景構成法と同様に広重の風景画においても、「枠」に対して「川」が如何なる形式をとるのかを分析する。

3. 風景構成法から見た広重の風景画の特徴

広重の風景画を分析した結果、「彼岸なしの川(図2)」「此岸なしの川(図3)」「左右の枠を結ぶ水平の川(図4)」「左右の枠を結ぶ斜めの川(図5)」「隅の川(図6)」「下枠と横枠を結ぶ川(図7)」「下枠と横枠を結ぶ先細りの川(図8)」「地平線と横枠を結ぶ先細りの川(図9)」「地平線と下枠(部

分)を結ぶ先細りの川(図10)」「地平線と下枠(全体)を結ぶ先細りの川(図11)」という10種類の「川」の類型を抽出した注2)(表1)。これらの「川」の出現率をグラフ化したものが図1である。

広重の風景画においては、「此岸なしの川」「左右の枠を結ぶ水平の川」で最も高いピークが見られる。これらの

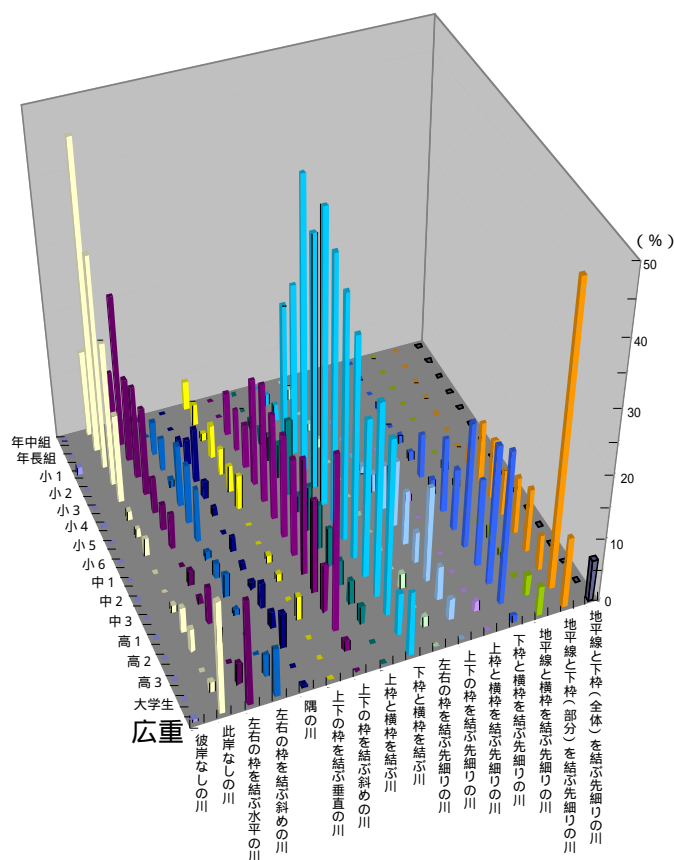


図1 幼稚園児から大学生までの風景構成法及び広重の風景画における各川の出現率分布

	東海道五十三次						木曾街道六十九次	名所江戸百景	計
	保永堂版	狂歌入東海道	行書東海道	隷書東海道	人物東海道	堅絵東海道			
彼岸なしの川	0	0	0	0	0	0	0	1	1 (0.6%)
此岸なしの川	5	3	2	2	6	2	1	9	30 (18.0%)
左右の枠を結ぶ水平の川	0	7	4	4	0	7	3	3	28 (16.8%)
左右の枠を結ぶ斜めの川	1	1	0	0	3	3	0	5	13 (7.8%)
隅の川	1	0	0	0	0	0	0	0	1 (0.6%)
下枠と横枠を結ぶ川	3	2	1	1	0	0	5	5	17 (10.2%)
下枠と横枠を結ぶ先細りの川	0	0	0	0	0	1	0	1	2 (1.2%)
地平線と横枠を結ぶ先細りの川	0	0	1	0	0	4	1	2	8 (4.8%)
地平線と下枠(部分)を結ぶ先細りの川	3	1	2	1	0	1	4	7	19 (11.4%)
地平線と下枠(全体)を結ぶ先細りの川	0	2	1	1	1	1	1	4	11 (6.6%)
その他	4	1	4	4	2	5	5	12	37 (22.2%)
計	17	17	15	13	12	24	20	49	167

表1 広重の風景画における各川に対する作品数(括弧は出現率)

A comparison between landscape pictures by Hiroshige and by the "Landscape Montage Technique"

A study on spatial schema by the "Landscape Montage Technique", Part 2

YANAGISAWA Kazuhiko, OKAZAKI Shigeyuki, MORIYAMA Atsuko



図2 「彼岸なしの川」
深川三十三間堂（名所江戸）



図4 「左右の杵を結ぶ水平の川」
太田（木曾街道）



図3 「此岸なしの川」
府中（保永堂版）



図5 「左右の杵を結ぶ斜めの川」
両国橋大川ばた（名所江戸）



図6 「隅の川」
石部（保永堂版）



図8 「下杵と横杵を結ぶ先細りの川」
千住の大はし（名所江戸）

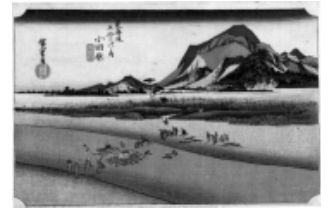


図7 「下杵と横杵を結ぶ川」
小田原（保永堂版）



図9 「地平線と横杵を結ぶ先細りの川」
玉川堤の花（名所江戸）



図10 「地平線と下杵(部分)を結ぶ先細りの川」
保土ヶ谷（隸書）



図11 「地平線と下杵(全体)を結ぶ先細りの川」
藤枝（堅絵）

風景構成法	広重
彼岸なしの川	
此岸なしの川	
左右の杵を結ぶ水平の川	
左右の杵を結ぶ斜めの川	
隅の川	
上下の杵を結ぶ垂直の川	
上下の杵を結ぶ斜めの川	
上杵と横杵を結ぶ川	
下杵と横杵を結ぶ川	
左右の杵を結ぶ先細りの川	
上下の杵を結ぶ先細りの川	
上杵と横杵を結ぶ先細りの川	
下杵と横杵を結ぶ先細りの川	
地平線と横杵を結ぶ先細りの川	
地平線と下杵(部分)を結ぶ先細りの川	
地平線と下杵(全体)を結ぶ先細りの川	

表2 風景構成法及び広重の風景画に見られた「川」

「川」は、風景構成法においては幼稚園児から小学校低学年に多くみられる特徴である。ただし広重においては、「川」の彼岸を斜めに描く、人の列や橋などを斜めに描く、遠くのを小さく描くなどの特徴により、ごく自然な奥行き感が表現され、風景構成法とは質的な違いが感じられる。

「左右の杵を結ぶ斜めの川」でもピークが見られる。この場合、鳥瞰的な高い視点からの平行投影図的な風景が多い。

その他「下杵と横杵を結ぶ川」や「地平線と下杵(部分)を結ぶ先細りの川」などでもピークが見られる。

風景構成法と広重の風景画にみられた「川」の種類を表したものが表2である。広重の風景画には上杵を結ぶ川が全く描かれていないことがわかる。このことから広重の風景画では、地平線あるいは水平線が、言わば「第五の杵」として画面を規定しているということが言えるだろう。また

「地平線と下杵(全体)を結ぶ先細りの川」が広重には存在し風景構成法では見られないことに代表されるように、広重では川の中央からの風景が多く描かれる。現代よりも、船が日常的に使用されていた江戸時代の生活景の影響が大きいと考えられるが、一方では「此岸なしの川」の世界観との関係性も興味深い。

他方、分類できない「その他」が22.2%存在した。その中には特に、「川」と「杵」との関係が、橋や船などの近景要素^{注3)}に隠れて判断できないものが数多く見られた。

4. まとめ

本論では、風景構成法の視点から広重の風景画の空間構成を分析し、10種類の「川」の類型を抽出した。

注

1) 「木曾街道六十九次」は英泉と広重の筆によるものだが、ここでは広重の作品に限定している。

2) 最後の二つの項目については、風景構成法の分類項目である「地平線と下杵を結ぶ先細りの川」を、新たに、下杵に部分的に接するものと下杵全体に接するものとに分けている。

3) 鶴も、河川と共に近景に「橋」、そして河川上に「船」が多いことを指摘している(文献1)、参考文献

1) 鶴心治, 萩島哲他: 広重の浮世絵風景画に描かれた河川景観の構図に関する一考察, 日本建築学会計画系論文集第482号, pp.155-163, 1996年4月.

2) 白石克編: 広重 東海道五十三次, 小学館, 1988.

3) 高橋誠一郎監修: 木曾街道六十九次, 毎日新聞社, 1975.

4) 名所江戸百景, 集英社, 1992.

* 1 京都大学大学院工学研究科 助手・工修
* 2 京都大学大学院工学研究科 教授・工博
* 3 京都大学大学院工学研究科 修士課程

Research Assoc., Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., M.Eng.
Prof., Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., Dr.Eng.
Graduate School of Engineering, Kyoto Univ.